

北海道における燃料電池活用型社会の形成に向けて

1. 北海道における燃料電池活用型社会形成の意義と優位性

(1) 北海道は、家庭用の冬期暖房など化石燃料の使用が多いことから、道民一人当たりの二酸化炭素排出量が全国平均より高く、その削減が急務。

(2) また、北海道は、

燃料電池の燃料である水素エネルギーの供給源となる天然ガス、バイオガス等が豊富に賦存していること。

水素の貯蔵・供給に関する革新的技術が北海道大学に集積していること。

冬期の熱需要が極めて大きく、熱と電力を供給し、高い効率で稼働する燃料電池の特性を発揮しやすいこと。

など、燃料電池を活用した地域社会の形成に向け、高い優位性を有する。

2. 今後の取組み・施策のねらい

(1) 平成14年度構造改革特別要求において、積雪寒冷で広域分散型社会である北海道に適した燃料電池活用型社会の構築に向け、調査を行う。

なお、北海道局では平成13年度において、北海道の産学官の協力により調査、検討を行っているところ。

(2) このような取組みを着実にを行うことにより、北海道発の技術革新の成果を積極的に地域に定着させ、燃料電池関連産業の集積を図る。

〔参考〕

北海道における天然ガス、バイオマス資源について

1. 天然ガス（勇払ガス田）

- ・ガス田の発見年 1989年2月
- ・商業生産開始 1996年3月
- ・1日あたり生産量 256,100 m³（2000年）
- ・推定埋蔵量 100～120億m³
- ・パイプライン（74 km）にて札幌圏へ供給

2. バイオマス資源

- ・業種別有機廃棄物排出量

業 種		排出量 (千t/年)
農 業		19,688
漁 業		81
製造業	食 料 品	2,489
	飲料・飼料	119
	木 材	601
	パルプ・紙	1,664
計		24,642

出典：北海道産業廃棄物実態調査(1998年)